読み聞かせに関する実証的研究

—読み手の違いを中心として—

藪中征代
(聖徳大学)

目的

同じ物語を読み聞かせする場合でも、読み手が異なれば聞き手の受け取り方が違ってくるであろう。この点については、この物語を読み聞かせするにはこのような感じの読み手が適しているという主観的意見は多いが、実証的研究はほとんど見当たらない。そこで、本実験では読み手の年齢(成人・児童)、読み手の性別の違いが読み聞かせを聞く時の物語のイメージや登場人物のイメージにどのように影響するかについて明らかにすることを目的とした。なお、本実験においては感情価を統一した物語を用いて実験する。物語の感情価を統一する理由は以下の通りである。読み手に対する主観的意見の多くが、「この物語は楽しい物語なので明るい声で読み聞かせをした方がよい」、「主人公の苦悩を描いた物語なので、低く落ち着いた声で読み聞かせをした方がよい」など、物語のイメージを全体的に捉えて、その関係で読み手の音声を規定しているように考えられる。そこで、この関係をより分かり易くするために感情価を統一することにより、読み手の音声と物語のイメージとの関係を検討することとした。

方法

実験計画：読み手の年齢(成人・児童)×読み手の性別(男・女)×物語の種類(明・暗)の3要因計画。群の設定は、読み手が成人の群と児童の群の2群とし、かつ各々の群を性別で2群に分け、実質的には物語の種類別の4群構成とした。すなわち、読み手が①30歳代成人男性で声優(以下男声と呼ぶ)、②30歳代成人女性で声優(以下女声と呼ぶ)、③小学校6年生男子(以下児童男声と呼ぶ)、④小学校6年生女子(以下児童女声と呼ぶ)の4群で被験者間計画である。

物語材料：提示物語は藪中(2002)で選定した明るい感情価の物語として、堀内順子作『暇な岬の菜の花荘』(PHP社,1994)、暗い感情価の物語として、大川悦生作『お母さんの木』(ポプラ社,1969)である。

実験材料：物語材料を30歳代男性声優、30歳代女性声優、小学校6年生男子、小学校6年生女

子が読み聞かせしたものをCDに録音し、実験材料とした。

被験者：①物語材料『暇な岬の菜の花荘』：小学校6年生134名(男子63名、女子71名)。男声群31名(男子14名、女子17名)；女声群25名(男子14名、女子11名)；児童男声群31名(男子16名、女子15名)；児童女声群28名(男子15名、女子13名)、②物語材料『お母さんの木』：小学校6年生115名(男子59名、女子56名)。男声群35名(男子17名、女子18名)；女声群33名(男子15名、女子18名)；児童男声群35名(男子17名、女子18名)；児童女声群31名(男子14名、女子17名)。

手続き：被験者はCDを聞き、その後、物語のイメージ評定12項目、登場人物のイメージ評定10項目について5段階評定を各自のペースで行った。

結果と考察

1. 明るい物語『暇な岬の菜の花荘』の分析

1) 読み手の音声の違いによる物語のイメージの差の検討

読み手の音声の違いによる物語のイメージの差を検討するために、藪中(2002)で明らかとなった物語のイメージ尺度の「明るさ」「好ましさ」の尺度得点について、読み手の音声(4)×被験者の性別(2)の2要因の分散分析を行った。有意差のみられた要因の多重比較にはTukeyのHSD法を用いた。物語の明るさにおいて、群の主効果($F(7,99) = 39.13, p < .01$)が有意であり、性の主効果、交互作用は有意でなかった。多重比較の結果、成人女性の音声での読み聞かせが物語の明るさを一番高く評価しており、続いて、成人男性、児童男子、児童女子の音声の順に明るさを高く評価していることが明らかとなった。また、物語の好ましさにおいて、群の主効果($F(7,99) = 20.25, p < .01$)、性の主効果($F(7,99) = 12.92, p < .01$)が有意であったが、交互作用は有意でなかった。多重比較の結果、成人女性が読み聞かせした方が児童の読み聞かせより、物語を好ましく評価していることが認められた。さらに、女子の方が物語の好ましさを高く

評価していることが示された。これは、毎日新聞社(1994)調査の学校読書調査による「感動する本」は、女子に好まれるという報告と一致している。以上の結果から、明るい感情価の物語『暇な岬の菜の花荘』の場合、成人女性の声で読み聞かせた方が物語のイメージをより促進させることが明らかとなった。

2) 読み手の音声の違いによる登場人物のイメージの差の検討

読み手の音声の違いによる登場人物のイメージの差を検討するために、藪中(2002)で明らかとなった登場人物のイメージ尺度「活動性」「柔和性」の尺度得点について、読み手の音声(4)×被験者の性別(2)の2要因の分散分析を行った。有意差のみられた要因の多重比較にはTukeyのHSD法を用いた。登場人物の活動性において、群の主効果($F(7, 99)=21.35, p<.01$)のみ有意であった。多重比較の結果、成人女性の音声での読み聞かせが登場人物の活動性を一番高く評価しており、続いて成人男性、児童男子、児童女子の音声の順に外面的な活動性を高く評価していることが明らかとなった。また、内面的な柔和性において、群の主効果($F(7, 99)=13.28, p<.01$)のみ有意であった。多重比較の結果、成人音声で読み聞かせた方が児童音声で読み聞かせたより、登場人物の柔和性を高く評価していることが明らかとなった。

3) 物語のイメージと登場人物のイメージとの関連

物語のイメージと登場人物のイメージとの関連を検討するにあたり、全実験群をこみにした尺度間相関の結果をTable 1に示した。

Table1 物語のイメージの下位尺度間相関 (N=114)

		物語		登場人物	
		明るさ	好ましさ	活動性	柔和性
【物語】	明るさ	-	.57**	.61**	.64**
	好ましさ		-	.67**	.47**
【登場人物】	活動性			-	.56**
	柔和性				-

** $p < .01$ * $p < .05$

物語：暇な岬の菜の花荘

物語の明るさは物語の好ましさ、登場人物の活動性、柔和性との間に有意な正の相関が確認された。また、物語の好ましさは、物語の明るさ、登場人物の活動性、柔和性との間に有意な正の相関が確認された。以上をまとめると、明るい感情価の物語の場合、明るいイメージの物語は児童にとって面白く、感動する物語として好まれていると言えよう。また、登場人物のイメージは物語のイメージに規定されていることが明らかとなった。以上の結果は、本実験において物語の選択(明るい感情価の物語)が正しかったことを裏づけるものである。

2. 暗い物語『お母さんの木』の分析

明るい物語と同様の分析を行い、以下の点が明らかとなった。

1) 読み手の音声の違いによる物語のイメージの差の検討

成人男性の音声で物語の明るさを一番低く評価していることが明らかとなった。また、成人の音声で読み聞かせた方が児童音声より、物語を好ましく評価しており、また、女子の方が物語の好ましさを高く評価していることが明らかとなった。

2) 読み手の音声の違いによる登場人物のイメージの差の検討

成人男性の音声での読み聞かせが登場人物の活動性を一番低く評価していることが明らかとなった。また、成人の音声で読み聞かせた方が児童音声で読み聞かせたより、登場人物の柔和性を高く評価していることが明らかとなった。以上の結果から、暗い物語『お母さんの木』の場合、成人、特に男性の音声で読み聞かせた方が児童音声より、登場人物のイメージを促進させることが明らかとなった。

3) 物語のイメージと登場人物のイメージとの関連

明るい物語の場合と同様の結果であり、物語の選択(暗い感情価の物語)が正しかったことをここでも裏づける結果であった。

総合的考察

物語のイメージの明るさとマッチした成人音声での読み聞かせが、物語のイメージ及び登場人物のイメージの促進に繋がることより、読み聞かせを行う際の読み手の声の明るさと物語の明るさとの間には密接な関連があることが本実験より示唆された。